



アメリカのシカゴを拠点に、記者として活躍している阿部寛子さんを広報4月号でご紹介しました。その阿部さんが、ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）を取材した際の体験レポートが届きましたのでご紹介します。

スポーツ取材の裏側

WBC取材で見た野球の素顔

阿部 寛子

WBC勝利の瞬間、マウンドの上で大塚剛投手（テキサス・レンジャーズ）は、両手を突き上げガッツポーズをきめました。ダグアウトから飛び出してくる日本代表ナインにもみくちゃにされながら、古巣サンディエゴ・パドレスの本拠地で「優勝」の2文字を噛み締める間に、いつもの「ヨッシャー！」すら忘れていたそうです。プロ野球選手による初の世界一決定戦、ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）。緻密な野球スタイルを貫いた日本代表は、決勝戦でキューバを下し、見事初代チャンピオンに輝きました。

「最後は僕を支えてくれたスライダースだった。サンディエゴで最後のマウンドに立ててよかった」。試合後に目を潤ませて、こう振り返りました。

昨シーズンまで、大塚投手が2年間プレーしたパドレスには通算436セーブを誇るトレバー・ホフマンが君臨。守護神の座を勝ち取れず、本意のままオフにレンジャーズにト

レードされました。本来ならば気持ちの整理と新天地で球団首脳陣に自分をアピールするこの時期、キャンプ参加と王監督からのWBC出場依頼は「究極の選択」だったことでしょう。日本代表のユニフォームを着て古巣で手にした世界一。柔和な笑顔には様々なドラマが刻まれていました。

日本では大勢のファンがオリンピックやワールドカップ同様、寝不足で試合中継を見ていたと聞いています。そのころ現地でも、やはり日本人記者が寝不足で取材に明け暮れていました。私もその一人として、米国代表や日本の対戦相手を主にカバーしましたが、さすが国際試合。野球を通じて、各国のお国柄も垣間見ることができました。

自国で開催中のシーズンを中断して大会に臨んだキューバや、予算の関係で直前まで対戦相手の資料が手元に届かなかったというメキシコ、更に、野球が普及して間もないため更なる野球人口を増やすべく出場した南アメリカなど、WBC参加において各国様々な事情を乗り越えたようです。当地の事情までは把握できませんが、この大会がもたらした野球熱は日本野球ファンが受けたもの



アメリカVSメキシコ戦を応援するファン

と変わらず大きかったと想像しています。

そして、選手一人ひとりに隠されたドラマ。それは、先述の大塚選手のようにハッピー・エンドを迎えたものだけではありません。

愛媛県出身の岩村明憲内野手（ヤクルト）は、将来のメジャー挑戦を視野に入れ、今回の大会では本場の選手を相手に実力試しもかねていました。しかし、15日アナハイムで行われた韓国戦の2回に本塁直前で左足を痛めました。王監督に直談判し先発出場を訴えるも、日本のシーズンを考慮した監督が首を縦に振るはずはありません。スタメン参加した大会で、「優勝の瞬間にベンチ」。後味は本人曰く「微妙」。けれど、そこから、新たなメジャーへの意欲も湧いたと話していました。

このような現場に立ち合い、その輝きを失うことなく読者に伝える報



日本VS米国の試合前（エンゼルスタジアム）

道の仕事。刺激もありますが、苦勞も絶えません。特に、アメリカで取材を終えても、時差の関係で東京のデスクと打ち合わせをするのが現地時間の夜中になります。そこから原稿を書き上げるとなると、締め切りより睡眠と闘うことしばしば。それでも「今日の原稿は楽しかった」「まるでクラブハウスの中にいるみたいだった」との感想が届くたびに、そんな辛さが吹き飛んでしまうのです。WBCの興奮も冷めないまま、現在はシカゴ・ホワイトソックスをメインに大リーグを取材しています。大リーグの球場はいつも乾燥した夏の風がグラウンドの芝のにおいを運び、その度に子どもたちの遊んだ重信川を思い出すのですが、現地の感動が松前町にも同じ鮮度で届くように張り切って取材をしようと思います。